8月7日に静波体育館で行われた「市老人クラブ連合会榛原支部　第6回輪投げ大会」

世代を超えた安心社会へ

―生き生きと年を重ねて

9月16日は、多年にわたり社会に尽くしてきた高齢者を敬愛し、長寿を祝う「敬老の日」です。

市民の4人に1人が高齢者の現在、高齢者が自分らしく、地域で健やかに安心して暮らしていくには、次のようなことが必要ではないしょうか。

・自分の健康を維持する。
・趣味や社会的活動に生きがいを見つける。
・地域でお互いに助け合う。

このように、元気で生き生きしている方を紹介します。

問い合わせ　高齢者福祉課
藤田　☎（23）0076

団塊の世代が高齢者に

市の総人口に占める65歳以上の人口割合（高齢化率）は、平成25年度高齢者福祉行政の基礎調査によると、25．6％と4人に1人が高齢者という状況です。団塊の世代と呼ばれる昭和22年から24年生まれの方が65歳を迎えていることが要因の一つです。

市内の世帯状況を23年度と比較すると、高齢者のみで構成される世帯が171世帯増加し、うち一人暮らし世帯が91世帯、夫婦のみの世帯が80世帯増加しています。核家族化などにより、高齢者のみの世帯は総世帯の10．9％を占め、年々増加傾向にあります。

生き生きと暮らすには

市内では55のシニアクラブと呼ばれる老人クラブ活動が行われ、自身の健康維持や見守り活動・環境活動などの地域に根差した活動を実践し、地域コミュニティの核として重要な役割を担っています。

グラウンドゴルフや輪投げだけでなく、日ごろから顔を合わせ、話を交わす中で、自然と見守り合い、支え合う関係が築かれています。

また、地域のボランティアの方々が中心となり、運営されているふれあいサロンも市内37団体で展開され、高齢者の心と体の健康を保つために、レクリエーションや健康づくりのための体操など、交流の場・介護予防の場として機能しています。

地域で支える仕組み

平成12年度に開始された介護保険制度は、老後の介護問題を社会全体で支えていくもので、すでに生活への定着が図られましたが、市の要介護・要支援認定者数は、年々増加している状況にあります。

今後は、団塊の世代が後期高齢者となり始める平成37年を見据えて、地域、関係機関との協働による見守り・支え合いネットワークの構築が必要です。その一つのモデル事業として、24年度には坂部区において坂部地区まちづくり計画「愛♡幸せ　さわやか坂部」が策定され、8つの主要施策の一つに高齢者の居場所づくりが挙げられました。

現在は実行委員会が立ち上がり、地域の方々が主体となり、部会ごとに取り組みが開始されます。

見守りネットワークの効果

市でも、平成25年2月から47の協力事業所による「高齢者等見守りネットワーク事業」を開始し、8月末現在の協力事業所は51となりました。

これは、高齢者が家庭や地域の中で孤立せず、住み慣れた地域で誰もが安心した生活を送ることができるように支援するもので、宅配業やガス、新聞販売店などの協力事業者が日ごろの業務の中で、「連日、天気がよいのに雨戸が数日閉めっぱなし」「新聞が数日分たまっている」など、高齢者宅の異変に気付いた場合に市へ連絡し、状況把握や支援へつなげるものです。

このほど、市内で3日分の新聞がたまっていた一人暮らしの高齢者宅があり、異変を感じた協力事業者の新聞配達員から市へ情報をつなげてもらうことができました。

発見された高齢者は熱中症や脱水症状、栄養失調などを引き起こし、生命の危険性がありましたが、通報により救急搬送され、一命を取り留めることができました。

発見した配達員の女性は、「新聞受けに新聞がたまっていないか、普段と違う様子はないか、気にしながら配達している。今回、無事だったとの連絡を聞き安心した。いつも、夕刊を楽しみに外に出て待ってくれているので、本当に良かった」と安堵の表情で話してくれました。

市では、今後さらに協力事業者を広く呼び掛け、高齢者が地域で安心して生活できるように支援していきます。

地域全体で支え合う

このように、高齢者が安心していつまでも健康で、自分の生きがいを持ち生活していくことができたら、どんなに幸せでしょうか。

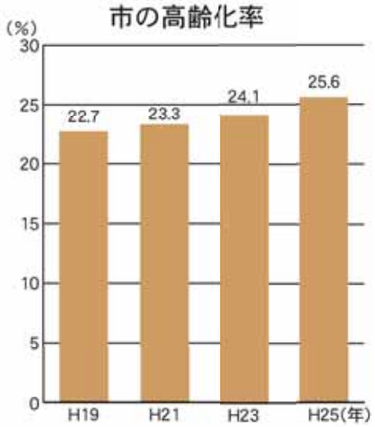
私たちが地域全体で高齢者を支え合い、高齢者も地域の一員として、これまでの豊かな経験と知識を地域に伝えていくことなどにより、地域全体で協力して生活していくことがこれからの社会には必要です。

市の年代別人口の割合

人口　49,055人　＊25年4月1日現在

平成25年度高齢者福祉行政の基礎調査

市の高齢化率



平成25年度高齢者福祉行政の基礎調査

高齢者世帯の状況

平成25年度高齢者福祉行政の基礎調査